

研究科 FD 報告

応用言語学講座 奥田智樹

授業科目名：対照言語学（金曜 1 限）

講義題目：文法化理論を援用した多義性分析

受講者：12 名 (M1：7 名、M2：3 名、D1：1 名、D3：1 名 / 日言文：10 名、多元：2 名)
全員が留学生

0. この講義題目を選んだ経緯

- ・ 言語の対照研究は多岐にわたるため、必ずしも言語同士の直接的な「対照」にこだわらず、複数の言語を共通に取り扱うための理論的な枠組みを提供することとする。
- ・ 学生が実際の研究に使うか使わないかは別として、言語について深く考えるための納得できる確固とした一つの視座を与えることを目標にする。

1. 具体的な授業の進め方

- ・ 初回の授業にプリント(配布物 1)に沿って概略を説明し、テキスト文献リスト(配布物 2)を配布した。テキスト文献としては議論がしやすいように例文の多いものを選んだ。
- ・ 年度始め(4 月～5 月)の最初の 3、4 回はイントロダクションとして講義形式で行ない、その後は学生の発表形式にした。テキスト文献リストの個々の文献についてあらかじめ担当者を決めておき、内容のレジュメを作らせて順番に発表させた。
- ・ 前期は日本語に関する文献を扱い、後期は日本語以外の言語(中国語、韓国語)に関する文献を扱った。

2. 実際に授業を行って感じたこと

- ・ 学生の受講態度は総じて真面目で積極的であった。文法化というテーマには皆基本的に興味を持ってくれた。
- ・ 最も学生の反応がよかったのは現代日本語に関する具体的な話である。同じ日本語でも古語は敬遠しがちであった。また、日本語以外の自分の知らない言語にはあまり興味を示さない学生もいた。特に中国語を扱ったときは中国語母語話者とそれ以外の学生との取り組み方の差が顕著だった。
- ・ 英語の文献を扱うことの困難さを強く感じた。実際に英語の文献を読みこなして研究に役立てられるほどのレベルの学生に出会ったことは残念ながらまだほとんどない。

3. 成績評価

- ・ 成績評価は平常点とレポートを総合して行った。

- ・ 平常点は担当した発表の内容と授業中の議論への参加の積極性の度合いから判断した。またレポートについては課題を2つ用意して(第1問：メタファーに関する問題、第2問：言語学と文法との違いについて書かせる問題)、前期の最後の授業に課して後期の最初の授業に提出させた。

4. 院生指導

- ・ 指導生は現在4名 (M1:1名、M2:2名、D1:1名) 全員が留学生
- ・ 具体的には1、2か月に一度くらいの割合で面談を行って研究の進捗状況について話をしている。構想発表会(M1)、中間発表会(M2)の直前はもう少し頻度を上げている。
- ・ 研究テーマは、特に留学生については自分が日本語を学んだ課程で難しいと思った点や関心を持った点から見つけることが多いようで、その意味で大変素朴である。
- ・ 言語系の場合、学生の具体的な研究内容には大きく分けて二つのタイプがある。
 - コーパスから集めた用例を基にして基本的に思弁だけによって自分の仮説を立証するもの (意味論、統辞論など)
 - 特定の被験者を対象にアンケートやインタビューによる調査を行ない、結果の統計的分析とその解釈を通じて自分の仮説を立証するもの (語用論、言語教育など)
- ・ 指導において苦勞する点は と では異なる。 は分量や構成の上でめどが立ちにくく、特に膨らまないテーマの場合は最後まで悩まされる可能性が高い。一方 は一度調査を始めてしまったら失敗しても手直しが効かない危険性が高いため、最初の段階における方向性の決定に慎重を期さなければならない。だがその反面調査結果の統計的処理まで全て終えた最後の段階にならないと突っ込んだ議論がしにくい。
- ・ 特に留学生は最初に希望する研究テーマとして日本語と母国語との対照を掲げることが多く、彼らの本来の強みは母国語である以上その知識は生かすべきだと思うのだが、実際の指導においてはその両者の兼ね合いをどうつけさせるかが難しかった。特に上記の学生については、扱う内容や時間的な制約などを考慮して、これまでは修士の段階では日本語に絞るように指導せざるを得なかった。
- ・ 個人的な課題としては、学生との指導における距離の置き方も挙げられる。修士の段階では何事につけて事細かに指示を与えるという姿勢でもよいかもしれないが、博士まで進むとなれば、学生を研究者として自立させることも考えなければならないと思う。